神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

はしがき

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 太田, 斎, Ota, Itsuku メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1146

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

はしがき

先ずは班員の変更についての報告である。既に前号の「はしがき」で述べたことだが，我が研究班発足以来のメンバー，吉田豊氏が京都大学に転出された。そしてその後任に林範彦氏が着任し，研究班における吉田氏の穴を埋めてくれることになった。今後の活躍に期待されたい。

今号は班長である私の恩師，山東大学教授の銭曽怡先生が号令をかけて下さって，博士課程の院生の李旭，洪小熙，張燕芬の三名が研究班に参加してくれた。羅福騰氏も銭先生門下で，1980年代から方言文法の研究を行っていた。現在はシンガポールの大学で中国語を教えておられ，教務に忙殺されているようだが，特にお願いして研究班に加わってもらった。その他，５号に論文を発表した孫立新氏が今回も論文を書いてくれた。呉語研究の分野で精力的に活躍しておられる石汝傑氏は漢語方言学の研究者には，特に紹介の必要はないだろう。鈴木氏はチベット・ビルマ比較言語学の学徒で，精力的にフィールドワークをこなしている。今回は班長ゆかりの研究者が大勢参加したので，漢語方言特集のようになった。

今号の内容的について言えば，羅福騰氏のものは方言文法に関するものではなく，口語語彙の「伶」（：付合う，～と）の音声形式及び意味機能の地理的変容についての考察である。この語は歴史的文献にも登場し，古くから使われているにも拘らず，書き言葉には先ず出てこない不思議な語である。石汝傑氏のものは方言歴史文法の研究で，呉語文献を博捜して虚字「得」の機能について考察している。張燕芬氏のものは閩語方言を対象に方言間の差異を言語接触の観点から分析したもの。李旭氏のものは河北覇県方言の同音字表で，近年北京語の非北方語的性格について語られるようになっているが，河北方言のデータは意外と少ないので，空白を埋めるものと言って良い。李氏は銭先生の手堅い学風を継いでいる。今後の語彙，文法研究の成果にも期待したい。洪小熙氏

は韓国人留学生。今回の論文は山東蓬莱方言の名詞接尾辞「子」に関する部分が面白い。語幹音節の如何で様々な形態となっており，所謂「子変」解明の手懸りとなり得るものである。孫立新氏のものは陝西戸県方言における重畳形式の機能に関するもの。鈴木博之氏のものは，自身のフィールド調査で得たデータを基に，ペマ語（中国では「白馬語」と表記）の分類上の帰属問題を論じたもの。私のものは丁種本西番訳語の校本（稿）で，かつて漢語近世音資料として扱ったもの。草稿は1980年頃に作成したものだが，今回はその後に公開された資料と付き合わせて，もう一度全面的に見直した。

鈴木，太田の２編はチベット語に関するものだが，私のものは漢語近世音資料としての可能性を追求したものであり，漢語音韻史の論文である。私のものも含めると，鈴木氏のもの以外は全て，漢語に関するもので，先に記したように，今号は対象言語のバリエーションには乏しいと言わざるを得ない（中国語の方言に関するものを纏めて一種とした上での話）。しかし，音韻，語彙，形態，文法の様々な面を扱っており，手法も記述研究，通時的研究，社会言語学的研究，文献学的研究と色々である。この点ではバリエーションが豊富であると言っても良かろう。

新任の林範彦氏には今号については残念ながら，投稿願えなかったが，今後は武内紹人氏とともに，チベット，ビルマ系言語の研究の成果を発表してくれるだろうから，以後の我が研究班の研究における対象言語の多様性については，一定の程度保証されていると言えるだろう。

2007年９月30日

アジア諸語の通時的，共時的研究

研究班代表　太　田　　斎

学内班員：武内紹人，下地早智子，林　範彦